

第3回仙台市総合計画審議会起草委員会 議事録

日 時 平成22年2月22日(月) 10:00～12:00
会 場 仙台市役所2階 第五委員会室
出席委員 江成敬次郎委員、大滝精一委員、小野田泰明委員、小松洋吉委員、西大立目祥子委員、間庭洋委員、柳井雅也委員[7名]
欠席委員 庭野賀津子委員 [1名]
オブザーバー 大村虔一総合計画審議会会長
事務局 伊藤企画市民局次長、佐々木総合政策部長、折田総合計画課長
議 事 1 開会
2 議事
(1) 新基本構想の策定方針について
(2) その他
3 閉会
配付資料 1 第3回起草委員会 論点ペーパー
2 都市像等の変遷と新しい基本構想におけるキーワード(案)
3 都市像イメージ図

1 開会

大滝精一委員長

皆さん、おはようございます。お忙しいところお集まりいただきましてありがとうございます。これから第3回の起草委員会を始めたいと思います。

早速ですが、最初に本日の議事録署名委員を指名したいと思います。

前回、小野田委員にお願いいたしましたので、五十音順ということで次に小松委員にお願いしたいと思いますけれども、よろしいでしょうか。

小松洋吉委員

承知しました。

大滝精一委員長

ありがとうございます。それではお願いいたします。

続きまして、議事に入ります前に定足数等の確認を行います。

事務局から報告をお願いいたします。

折田総合計画課長

それでは報告をさせていただきます。

本日、7名の委員がご出席で、定足数を満たしていることをご報告いたします。

また、本日はオブザーバーといたしまして会長の大村先生にもお越しをいただいております。

続いて、資料の確認をさせていただきます。

お手元に座席表、次第、資料一覧、それから本日の会議に使います資料 1 から 3、それからいつも置かせていただいております資料のファイルでございますが、審議会の資料と起草委員会の資料の名前が入ったもの、それぞれ置いておりますので、ご確認いただければと存じます。

資料の不足等ございましたら、事務局までご連絡いただければと思います。

以上でございます。

大滝精一委員長

どうもありがとうございました。

2 議事

(1) 新基本構想の策定方針について

大滝精一委員長

それでは、早速ですけれども議事に入りたいと思います。

議事の第 1 ですけれども、新基本構想の策定方針についてです。

この議事について、これから時間を少しとって皆さん方からいろいろなご議論をいただきたいと思っているんですけれども、この間いろいろな、事務局ともご相談をしたり、それから、今日も出席いただいております大村会長とも 2 月 16 日、先週だったと思いますけれども、少し意見交換をさせていただきながら、この基本構想についてどんな進め方とか論点があるかというようなことについても少し意見交換をさせていただく機会を持ちました。

それから、事前に、非常にまだラフなものですけれども、委員の皆様方から少しサウンディングというか、ご意見をいただくということで、事務局のほうで皆様方に個別に訪問させていただいてご意見いただいていることと思います。そんなことも踏まえて、これから少し新基本構想の策定方針について進めていきたいと思っています。

前回は、既に皆様方ご存じのとおり、市役所の現行の基本構想の総括を踏まえて、新しい基本構想をどういう方向で策定していくのかという議論をして、第 3 回審議会で報告を行うことにしていたんですけれども、基本構想の中心となる、特に都市像の部分については多様な意見があって、前回でのこの起草委員会としての統一した見解というのを得る段階にはいかなかったと思っています。

そんなこともありまして、都市像の大枠をある程度定めてから審議会に報告をするということでない、なかなかこの後も難しいということもあるかと思っています。それから、かえって審議会の中でいたずらに議論が拡散してしまうということもあるかもしれないと懸念しまして、前回の終了後に事務局とも相談しまして、予定しておりました審議会を延期してもらい、本日、あるいは場合によっては来月の半ば、第 2 週ぐらいにも起草委員会を開催させていただくということで皆さんにご連絡させていただいた次第です。

皆様方にはお忙しいところ、急遽、日程の設定ということで大変ご迷惑をおかけしたかと思っていますけれども、そういう状況ですので趣旨をお酌み取りいただきたいと思います。

それでは早速ですけれども、これから具体的な議論に入りたいと思います。

一応、委員長として私のほうから幾つか、事務局とも、それから先ほどもお話ししました大村会長とも意見交換を踏まえて資料を用意させていただいておりますので、まずそれについて少し私のほうから説明させていただき、それから、大村会長からも少しお話をいただいた後で、具体的な意見交換に入っていきたいと思っています。

それで、最初に資料1をご覧ください。

基本構想の都市像の検討を行うに当たって踏まえるべきこととして、大村会長との意見交換も踏まえて、少しこんなことについて今日の起草委員会でご意見いただければということを出したものです。

全体として、今日の論点の中身としては大きく2つあります。ひとつはそこに書いてあります「行動する市民力」を引き出す新しい協働のあり方という点です。これはこれまでの議論の経緯からも、皆様方ももう十分ご承知かと思いますが、資料3にこういう図があります。これは既に委員の皆様方ご覧になっていらっしゃると思いますけれども、この図の4つの木が出てきているその根っこというか、土台というか、土壌というか、その部分に「行動する市民力」というのが出てきていて、仙台における「創造」の原動力だとか、それから、その創造というのは仙台固有の資源の発掘、融合、組合せによって新しい価値を生み出すというような、そういう議論が行われていて、ここの認識がすごく大事だということは既に皆様方からもたくさん議論をいただいているところなんです。

ただ、せっかくここを打ち出すとすると、これだけで「行動する市民力」としていいのかどうかについて、もう少し詰めた議論が必要かなというふうに感じています。これまでももちろんいろいろな議論があったんですけれども、例えばさまざまなこれから市としての事業を展開していくときに、市民の声をもっとしっかりと聞くとか、市民の声の聞き方を工夫するとかというところで、基本構想としてももう少し新展開というか、これまでの既存の基本構想とは違ったものがあっていいんじゃないかという気がします。

それから、当然ですけれども、こういう市が行ういろいろなまちづくりとか、それから計画から事業に至るまでPDCAサイクルを回すということをやっているわけですが、特にこの実行とかそれから事業、プロジェクトあるいはまちづくりに関する評価といったところにもっと市民の評価が実際に入ってきて、それを受けていろいろなものが進んでいくというような、広い意味で言うと協働ということになると思いますけれども、要するにその協働の中身についてもうちょっと立ち入った議論が必要じゃないかということとかですね。それから、その先には多分、大きな行政システムの改革のようなものがあっていいんじゃないか。今日も何かニュースで新しい行財政計画ということがあったんですけれども、あれは非常にある意味で言うと4、5年くらいの短いスパンで、今すぐ何を解決しなくちゃいけないかというところから出てきているもので、多分今回の基本構想の中ではもう少しロングランで、どういう方向で行政システムを変えていったらいいかという議論がこの中に入ってきてもいいかなと思います。

それから、これは既に起草委員会の中でもたくさん議論があったことなんですけれども、この4つの木があるんですけれども、実際はこの4つの木の間の連携とか、この4つの木の間に落ちてくるという問題、市役所の組織で言えば部局間の連携だとか、そういう幾つ

かの、これまでの組織とか分類の枠組みではない問題をどう取り上げたらいいか、この起草委員会の中でももっと横断的な取組が必要だという話があったわけですがけれども、そういうその木と木の間の関係性とか横断的な取組とか、市役所の組織の中で言えば部局間の連携とか協働みたいなものを推進するための市民力とは何かという、そういう議論がやはり必要である、もうちょっとあったほうがいいかなと思うんです。

それから、これはもう既に委員の皆様方からもご意見はいただいているんですけども、市民自体もそんなに完全なものではないわけで、いろいろな試行錯誤をしたり、場合によっては市民の側もいろいろなことを学んだり失敗したりしながら育っていくという側面、だから市民が育つとか市民が成長するとか、時々やっぱり市民の側でもミスをしたり、試行錯誤しながら前に進んでいくとかという取組がもっと本来あっていいんじゃないかなと思うんです。

ですから、ここのところは「行動する市民力」という言葉だけでぼーんと書いてあるんですけども、この中身についてもうちょっときちんと踏み込んだ議論をすれば、新しい基本構想としての斬新さとか、少なくとも 10 年前にはあまり議論されなかったような論点が出てくるのかなと思います。ですので、ひとつはこの点について皆さんと少し、もう少し突っ込んで、議論を深める必要があるのではないかと感じていますし、これは薄々そういうことについてお感じになられている方がたくさんいらっしゃると思います。これは論点のひとつです。是非、今日そのあたりについても少し委員の皆さんからご意見いただきたいと思っています。

もう一回、その資料 1 のところに戻っていただいて、論点の 2 つ目は、10 年前の基本構想をつくっていく上でも問題にはなっていたし、実際には現行の基本構想を読んでみると、その問題には触れられてはいるんですけども、しかし、この 10 年間でかなり状況が変わってしまっているという問題があります。その点については、その状況の変化ということを中心にきちんと踏まえて、今度の新しい基本構想の中でしっかりとした対応をとっていくということを書き込んだほうがいいんじゃないかなというふうに思います。

この資料 1 に書いてある 4 つの項目だけではないと思うんですけども、特に重要だと思うところ。最初に人口半減の世紀ということが書いてあります。10 年前も人口が減っていくことは皆さんが予測していたわけですがけれども、その減り方がすごく激しいということです。それから、特に仙台だけでなく東北全体の人口の減り方はもっと激しくて、それに対して本当にちゃんと従前の基本構想としての備えをしているかどうかということについては、多分 10 年前よりもっと課題が切迫しているし、それから、人口の減り方とか、減ったときに何を私たちができるかという課題の整理とか、それに対する対応、これは仙台市の中だけでなく、東北地域全体を見た上での対応ということについても、かなり状況が 10 年前とは違ってきているんじゃないかなと思います。

それから、ここでどこまで議論できるかよくわかりませんが、その人口が減少すると言っていて、現行の、この間事務局から提示された減少の予測でも 2050 年から 55 年くらいには大体仙台市の人口は 76、7 万くらいまでに落ちていくというようなことが一応予測されているんですけども、そういう形で本当に落ちていくのかどうかということについても、もう少しいろいろな議論があってもいいかなと思うんです。もしかすると極端に仙台

に一極集中していくという可能性、例えば北海道の札幌みたいなことが本当に起こらないのかどうかとかです。

そうなってくると、東北全体のパターンとしては人口は減少していくことになるかもしれないけど、仙台自体は必ずしもそういうふうには言えないかもしれないんです。ですから 70 数万くらいまでずっと、この 40 年くらいの間に減っていくというような単調的な減り方というものでいいのかどうかとか、そういう問題ももしかするともうちょっと議論があっていいかなと思います。

それから、2 つ目は高齢化の問題で、これはいろいろな議論が既にあります。議論がありますけれども、高齢化に対する新しい技術とかサービスの開拓といったような側面とか、それから、特に少子化していくところで子供にとってとか、子供たちにとってもう少し未来を切り開いていくとかという議論、あるいは次世代の子供たちを育てていくための社会としての全体をそこで支えていくということを、どんなふうに考えたらいいかという問題です。

この 2 番目の項目についてはこの起草委員会の中でも議論はかなりあったと思います。例えば、高齢化のようなものを必ずしもそんなネガティブとか暗い側面だけでなく、もっと別の側面から見てもいいんじゃないかとかという議論はあったと思うんですけども、もう少しここも本来突っ込んでおいたほうがいいかなと思います。

3 つ目は、アジアとか東アジアというのが、これは前の基本構想でもキーワードになっていたんですけども、特にこの 10 年間、中国とかインドを始めとする新興国の成長が著しくて、そことの関係性をどう考えていったらいいか。一言で言ってしまうと、その新興国の台頭とかそこから出てきている成長力とかエネルギーとかというものを、やっぱり仙台とか東北が取り込んでいくという発想がますます重要になってきていると思います。

しかし、他方で東北も、それから仙台の経済とか産業もかなり、今、閉塞感があって、なかなかそこを突破口としてどうやって切り開いていったらいいかという足がかりとか手がかりがつかめない状況になっていると思います。それから、特に新興国を始めとする成長の拠点と、どういうふうにして仙台なり東北がつながっていくのかという、そういう議論がもっとあっていいかなと思います。

これまでの基本構想の中では、地球規模の交流だとか世界都市とかというような、そういう表現の仕方をしていたんですけども、そんな大上段に構えた言い方でなくてもいいですけども、もうちょっと議論としてはそういうアジアの、あるいは成長センターとか新興国の成長みたいなものをどういうふうにはばねにして、我々がこれからそういう新しい成長をつくっていったらいいかという議論がもうちょっとあっていいかなと思います。

それから、最後の論点はコンパクトシティということで、これも実は前の基本構想にはあった話なんですけれども、現実のこの 10 年の進展の中で、例えば郊外団地の空洞化とか低密度化ということが一方で非常に急速に進んでいるということと、逆に都心にすごく、例えば高層マンションが林立するような状況に、今、仙台は近くなっているわけなんですけれども、しかし、こういう同時進行の中で、確かに見かけ上コンパクト化が起きているんですけども、どのようなまちづくりのモデルをその中でつくっていったらいいのかということについては必ずしもはっきりとした方向が見えていないと思います。要す

るに、コンパクトシティ、コンパクトシティということは言われているし、仙台の中でそれが大事だということは多くの人たちが認識していると思いますけれども、コンパクトシティをどのようにうまい方向に導いていったらいいか、制御していったらいいかということについてはあまり十分な議論はできていないと思います。

それから、そのようなコンパクトシティをいい方向に導いていくときに、先ほどもあった市民の力とか、市民の行動みたいなものをどうやって結びつけていったらいいとか、それから、恐らくそのコンパクトシティの議論に非常に重要な影響を与えるであろう地下鉄東西線の問題のようなものをどのように考えていったらいいとか、そういう問題というのここにも絡んでくるかなと思っています。

この2番目の論点は、先ほども申し上げたように、既に10年前の基本構想の中でも認識はされていたことですが、事態がかなり変化してきていて、そういう大きな変化とか動向の中で、もう少し新しい基本構想の中では突っ込んだ議論が必要になってきているんじゃないかと思っています。そんなことも踏まえて、これも事務局と相談をしながら、次の資料2のところではキーワードを少し出してみようということをしました。

このキーワードについては、一番右のところに新しい基本構想ではこんなことがキーワードになるのかなということを幾つか列挙しているということと、それから、そのベースのところにもう少し市民像のようなものをはっきりと示すとか、それから、実際に仙台市がいろいろな事業を進めていく、あるいはまちづくりを進めていくとかということをするときに、だれが何をしていくのかというそのプレーヤーの役割のようなものもその中にある程度書き込んでいく必要があるんじゃないかということについては、これまでも皆さん方からご意見いただいているかと思っています。

資料3については、これは先ほども説明しました。皆さん方からもいろいろなご意見をいただいた上で、しかし、基本的には資料3のこの4つの木が並んでいるところは、大きな方針としてはこの4つの木というのは既に前の基本構想にあったものですから、そういうものの原型はしっかりと維持をしながら、しかし、先ほどお話があったようなこの土壌の部分とか木と木の間のつながりとか、それからちょうど真ん中あたりのところに市民協働という黄色いゾーンが入っているんですけど、こういうものをどう考えていったらいいかとかということでは、もう少し踏み込んだ議論とか、10年前とは違う議論が必要かなと考えています。

それから、一番真ん中のちょっと上のところに仙台に住まう誇りと書いてあるんですけど、そういう市民から見た仙台のアイデンティティーのようなものも、本当はもうちょっといろいろな議論があっていいかなという感じもします。

それからもうひとつ、資料3の最後のところですけど、実はこれが一番悩んだところです。いい解決策になっていません。何を言いたいのかという根本的なところは、要するにもうちょっと、国とか地域の中に閉じてしまうのではなくて、あるいは今の閉塞感の中で全体がクローズになってしまいうんじゃなくて、もうちょっとやっぱりアジアとか新興国を中心として、それ以外の国々とのつながりをつけていくためには何が必要かということです。そんなことをちょっと書いてみたものですが、必ずしもうまく思いが伝わっていません。

例えば、左の下のところの学都から生み出される“知”というのがあるんですけども、ここで例えば私が具体的に考えているのは、留学生のパワーを仙台に生かすといったことをもっときちんとやる必要があるんじゃないかと、反対に、海外で学んだ人材をどうやってうまく仙台とか東北の中で活用していったらいいのかという話とか、それから、例えば私の大学でいえば今度大学にサイエンスパークができるわけですけど、サイエンスパークに世界的な企業をちゃんと連れてくるというような、そういうレベルの話、要するに学都をてことして世界につながっていくためのもうちょっと具体的な流れのようなものが示されていくといいかなという感じを持っているということがひとつです。

それから、特に右側、21世紀型新産業と書いてあって、これはフィンランドと、今やっている健康福祉のようなものはすごくいいと思いますし、これからいろいろな意味でのクリエイティブ産業というのが出てくるとは思いますけれども、特に重要だと思うのは、先ほども申し上げたようなアジアの諸国の企業ともっとアライアンスをしていくというような、特にアジアの諸国の中小企業との間のアライアンスをどうやって強化していったらいいとか、逆に新興国のパワーとか成長力とかというものをどういう形で取り込んでいったらいいのかとか、それから、これはもっと先の話かもしれませんが、高齢化対応の技術とかサービスを輸出していくという話、こういう議論が本当はもっとあっていいんじゃないかと思うんです。せっかくそういうものがあるわけですから、それをどう使っていったらいいのか。

ほかにもいろいろあると思います。ちょっと悩ましいのは、一番上に書いてある歴史・文化・伝統・自然と調和した快適な都市生活なんていうのがあって、こういうものをほかの国とのつながりの中でどう考えていったらいいとか。今、たまたまバンクーバーオリンピックをやっているので、解説者の人たちもバンクーバーのことを世界で最も住みやすい都市だって言っています。私もそう思いますけど、でも本当は仙台をそんなものにしてほしいなという感じがあるんです。バンクーバーは大きなまちですけども、でも行ってみると仙台とよく似ているし、バンクーバーのまちをもうちょっと小ぶりにしたような感じのまちとよくイメージとして合うんじゃないかと思っているんです。

そんなものもいいかどうかはちょっと別としても、何かそういうものがもう少し出てくるといい、特にこの資料3の2枚目に書いてあるところは十分にまだ議論が尽くされていないと思いますけれども、こういうのがもうちょっとあっていいんじゃないかなという気がします。

一応、論点の資料1のペーパーに即して、これまで検討してきたこと、それから大村会長とか委員の皆様方ともいろいろなご意見をいただきながら、私としてはこれまでの到達点、あるいはこの中で、私個人も含めてどんなことが論点としてあり得るかとか、どんなことがもう少し、その基本構想、新しい基本構想の中で盛り込まれる必要があるかといったことについてちょっと考えてみたということです。

これは大村会長とも意見交換をし、それから大村先生からもいろいろなご意見をいただいているので、すみませんけれども、大村先生のほうからも少しお話しただけるとありがたいと思います。

大村虔一会長

オブザーバーがあんまりしゃべらないほうがいいんだろと思いますがけれども、大滝先生に大変うまくまとめていただいていると思います。僕は県の教育委員会にかかわって、子供を取り巻く閉塞感の状況というか、それは我々もこの先の夢というか、どういうふうに見たらいいかわからないような状況で計画をつくるということに多少戸惑いがあるわけですけど、人口が減ってくるということは、結局それぞれタックスペイヤーの数が減るわけでありますから、どんどん 20 世紀みたいに右肩上がりしていたときのような、次の時代に夢を大きく語っていくというような世界ではなくなっていくということはかなり見えている中で、しかし、それじゃあどういう夢を描くのかというと、世界の人口密度だとかそんなことから見ると、まだまだ日本は人口密度が高いわけでありますから、そういう意味で人口が落ちてきてもほかの国と比べて著しく大変になるというわけではないということはよく見えるわけで、今までとやっぱり相当変えた物の見方をすることによって、幾らでもそれぞれの人たちがある種の満足を得られる暮らしというのはつくれるんじゃないかなと。

片やその隣あたりでは、中国や何かがものすごい勢いで伸びているわけですね。伸びているというのは、逆を言うと、いわゆる産業が伸びることによって起きる諸問題、環境の問題だとかそういう問題がものすごい勢いで増えてきているということだろうと思うんです。そういう中で、アジアの中で日本が果たした少し先駆的なことをやることによって富を得たり、あるいはいわゆる公害のようなものに立ち向かった力とか、そういう技術開発だとか、そうした先駆的な要素というのがあるので、あるいはまた高齢化社会なんていうのも先駆的な、なろうと思ってなったわけじゃないけど結果としてそういう状況になっていて、そこをどういうふうに切り開いていくのかなんていうのは、恐らくこの何十年かのアジアあたりで起きてくる問題を少し早く我々は体験しちゃったということだろうと思うんです。それで、そうしたときに起きてくるノウハウをうまく地域の人、アジアの人たちと共有しながら、経済成長の大きく伸びる枠組みの中で豊かさを維持していくといったあたりの絵をかくというか、そんなような仕組みが何タイプがあるのかなと、今、思っているんです。

そういう意味では、やっぱり東北というのが日本の中では相当大変な状況を迎える場所のひとつと僕は思っていて、人口の問題や何かでも青森、秋田あたりは一番成長の縮みの激しいところになるというのが今の実態でありますし、そういうことを踏まえながら、東北をしっかり維持するためにそれぞれの都市が持たなければいけない役割というのは今まで以上に大きくなると思いますが、その中でも仙台というのは極めて大きなテーマを持っていて、下手をするという言い方がいいかわかりませんが、先ほど大滝先生がおっしゃったように、仙台だけに集中してしまうということだってないとは限らない。

その辺がどこでどっち側に振れるのかというのはなかなか予測できないんですけど、そんなことを踏まえて、従来の計画というのはどちらかというと自分中心の計画、仙台なら仙台の計画で済んでいたんだけど、どうも次の時代を、自分たちが豊かになるためには、仙台と東北とか仙台とアジアとか、そういう視点からの発想をかなり導入しないといけないのではないかな。その仙台が持っている市民協働なんていうのはまだまだ十分だとは

思えませんが、遅れているところから比べればいろいろな試みがあちらこちらでなされている、そういう状況で培ってきたことをやっぱりアジアの人たちと共有したりするというような、いろいろな分野で手を結べる仕組みを考えながら、仙台の将来像というのを描くのがよろしいのではないかと私も思っております。

ひとつは、資料１では１番と２番の１のほうであります、やっぱり１番のほうに具体的に市民がいろいろなことをやっているのをさらなる力に、どういうふうにしてつなげていくかという市民側での仕組みとか行政側での仕組みとか、そういうのが従来からも話には載っているけれど、あまり具体策としては載っていない、それを大胆に具体的なものとして描いていくというようなことが大切なんじゃないかと思っております。

このぐらいにさせていただいて、皆さんの意見を伺いたいと思います。

大滝精一委員長

ちょうど 30 分ぐらい、今過ぎたところなので、あと残りの時間で皆さん方からご意見いただきながらというところで、今日 1 時間半でどこまでまとめられるかはちょっと私は自信がないしよくわからないんですけども、皆さんの議論をお聞きしながら考えてみたいと思います。

それで、せっかく一応論点を 2 つに切っているの、最初の論点、「行動する市民力」を引き出す協働のあり方ということで、少し「行動する市民力」という内実をしっかりと豊かなものにしていこうというような論点について、最初に少し皆さんからご意見をいただき、それから次の 2 番目の都市像についてもうちょっと突っ込んだ議論ができるところについて議論していくということにしたいと思います。

ただし、これはもう既に絵からもおわかりのとおり、１と２はくっついているので、全くばらばらに分離するということをして困る場合があるので、場合によっては特にこの 2 番目の都市像の検討のところで議論していくとまた 1 に戻ってしまうかということがあるかもしれないですけど、まあそこはいいやと、少し行きつ戻りつしてもやむを得ないと思うんですけども、一応あまり議論があっちに行ったりこっちに行ったりと飛んでしまうのも何だと思しますので、最初はこの「行動する市民力」と書いてあるその一番土台というか土壌のところについて、少し皆さんからご意見をいただいて、その後、2 番目のもうちょっと踏まえるべき時代の変化について議論いただいて、もう一回、時間があれば両方に戻って全体のご意見をいただくというか、そんな進め方でやっていきたいと思します。

それではどうぞ、まず 1 番の論点のほうから。

どうぞ、柳井さん、お願いします。

柳井雅也委員

先生すみません、ちょっと総合的な話になるかもしれないですけどよろしいでしょうか。

今、ちょうど大村先生が 10 年前の計画と比べると、人との交流とか、あと東北や世界における仙台の地位をどう考えるのかという話があって、実は私、この計画の起草委員になってからずっと考えていたんですけども、やっぱりどう考えても兄弟関係というか、

ベースに 10 年前の議論は確かにあるんですけども、今、新しいものはどこなのかというところをきちっと委員の間で共有しておいたほうがいいと思ったんです。

私なりに考えていたこと、大村先生もちょっと言われたところにかかわるんですが、やはり今まで 10 年前の計画というのはクローズドなシステムで、その中できれいに完結しているという点が非常にあって、我々もそれを打破して発展させていこうと思うと、やっぱりこれはオープンシステムにしていかななくちゃいけないだろうということなんです。そのとき、その特徴の 1 点目としては、今回出てきた市民力というのがあったと思います。

それと 2 点目は、今までのところ、10 年前に言われていたことを認識されていたことは大滝先生も言われていましたけれども、それは言ってみれば気づきのレベルなんですよね、こういうことがあるんじゃないのといったような。我々は今、新しい戦略を考えていく場合、あるいは戦術を考えていく場合というのは、そういったものを具体的にしていく作業、つまりシナリオとあと組織体制をどうしていくかということです。このとき、その市民力をどう活用していくのかという論点に入っていくんだと思います。

3 点目が、今、申し上げましたように、クローズドからオープンへ持っていくということで、交流というものをもっと強く促進していく必要があると思うんです。これは後でまた詳しく申し上げたいと思うんですけども、一応そのオープンというのはどういうことかということ、例えば人口減というと非常にペシミスティックな話になるんですけども、交流人口というのを入れていくと実はもっとにぎやかになっていく、例えば観光であればインバウンド観光になりますし、あと産業、経済活動で言えば、例えばセントラル自動車が出てきて、買物やあるいはいろいろな文化あるいは刺激といったものを仙台に求めてくることもあり得るわけですよね。そうしますと、閉じた仙台じゃなくてもっとオープンな、いわゆる交流ということ 키워ドにした仙台というのがやってくるわけだと思うんです。

それでいくと結局、後で議論になっていくと思うんですけども、都市像のところの 2 番目の論点、1 番目の人口の問題と、あと 3 番目の中国、インドの問題は、新しい我々の構想の中で発展させていく、あるいはアピールしていくポイントになっていきますし、あと逆に 2 番目の高齢化の問題、あるいは教育の問題、それとあと 4 番目のコンパクトシティの問題はむしろ我々のアイデンティティーをどのようにつくっていくのか、先ほどあったバンクーバーの話なんかもあると思うんですが、仙台の魅力をどう発信していくのかというところになっていくと思います。

そういった点で、この 4 つの柱というのは言ってみれば前の計画の居抜きです。外側だけ残しておいて中身は変えていくんですが、戦略とか戦術ということをきちっと組み込んでいけばおもしろい話になっていくし、その限りで、その 1 番目の市民の声の聞き方という、先ほどおっしゃっていましたが、例えば、地域経営会議のようなものを、どういう組織、内容にするかわかりませんが、そういった市民の声とか、あるいは役所のいろいろ考えていることがお互いインターフェースがとれるような、第三者の組織というようなものを立ち上げていく必要があるんじゃないかと考えています。

とりあえずここまで。

大滝精一委員長

ありがとうございました。非常にすっきりときれいに整理していただいて、少し頭の中がよく整理できました。わかりました、ありがとうございます。

柳井先生からせっかく、今、全体の動きをいただいたので、引き続いてどうぞ、皆さん方。当面、最初はだから「行動する市民力」というところからいきたいと思うんですけれども、そのあたりのところを中心として。

是非どうぞ、ご意見いただければ。どうぞ。

西大立目祥子委員

やはりこの間の会議のときには、私は何か市民が動くまちというのを都市像に入れたらいいんじゃないかと考えていたんですけれども、これをいただいて、大事にしたいのはやはりすごく変わっていくこれからというものに対して、これからの基本構想をつくるときに、前と同じ都市像でいいのかなというところだけがすごく疑問に思っていたので、その土壌、いわば土を育てるようなところに市民というのを位置づけるというのはとてもいいのではないかなと思いました。

「行動する市民力」という言葉自体はどうなのかな、まだちょっと私としてはしっくりこないようなところもあるんですけれども、この市民力の市民ってだれなのかなというのをやっぱりきちんと考えていくのが大事かなと思います。私は一応、市民活動をしているんですけれども、やはり今までの市民という地縁型というか、町内会に代表されるようなその地域に暮らしている方たちを指したんだと思うんですけれども、ここ10年ぐらいの間にそうじゃない市民がすごく育ってきていて、恐らく地縁型だけでは解決できない地域の課題というのが地域のあちこちにすごく深刻な形をとったり、あるいはまだそこまで至らないにしてもいろいろ出てきているんだと思うんです。

その課題に対して、多分今までの地縁型コミュニティでは解決できなくなっているだろうし、その解決できなさは、ますます深刻になっていくんじゃないかなと思うんです。そうするとやはり地域とNPOとか、そこがクロスする、先ほど柳井先生が交流とおっしゃったんですけれども、やっぱりかかわってそれで何か解決の糸口を見つけるような、そういうことがいまだ仙台ではまだほとんど行われていないのではないかなと思います。だからそれについてはきちんと明示をして、大滝先生がさっきもう少しこの中身をきちと書きましようとおっしゃったんですけれども、確かに本当にそこを、こういうやり方があるんじゃないかというところまで踏み込んだ書き方ができればいいかなと思います。

あともうひとつは、市民と市役所の関係というのもあると思います。やはりまちづくりを市民に丸投げという形での市民力では困ると思いますし、本当の意味での市民協働ということを考えると、やっぱり市役所自体もオープンマインドになっていただかないと困るんですよ。そこをクローズして情報も閉じて、もう決まって、決まってからオープンにする、そのときにあなたたちそう言ってももう遅いですと言われて、私はそういうふうに言われることが多いんですけれども、それじゃあやっぱり困るなと思いますし、その市役所の仕組み自体も、さっき先生が行政システムの改革が必要だとおっしゃったんですけれども、もうちょっと市民に対して開くという、そういうセクションというか部署も必要だ

と思いますし、職員の方々お一人お一人が市民と一緒にやるという、そういう考えなり行動なりというのが必要だと思うので、これは「行動する市民力」イコール行動する市役所職員でもあるのかなと思っていました。

それで、単に市民が行動すべきであるとして書いても、やっぱり市民を育成するのは市民であり行政であると思うので、そこをどう育てていくかということについてはもう少し踏み込んだ議論が必要だし、どこまで書けるのかわかりませんが、そこをきちっと考えておかないといけないかなと思います。

仙台は梅田川の清浄化に始まって、スパイクタイヤなんかにしてもすごく市役所自体の誘導がとても上手で、それで市民との協働というのを図りながら解決してきたと思うんですが、何かそれだけでは恐らく足りなくなっていて、あとそれを少し進化させた形の育成がいいのかなというふうに思います。

とりあえずこのことについてはそんな感じです。

大滝精一委員長

どうぞ、ほかの皆さん。是非お願いします。

間庭洋委員

先ほどの両先生の話で大分頭の中も整理できたんですが、今の「行動する市民力」のところでは、今の西大立目さんの意見だったんですが、やっぱり市民力、この主題自体すごくいいなと思いますので、さらにこれをこれから深めていくわけですが、やはり鮮明にしておきたいのはその市民というのはだれなのかということを提示しないと漠然とした市民になってしまうのがこれまででありました。

この絵にも市民・企業・行政の協働となって端的に示されているんですが、もう少し具体的に言うと、同じ人間、住民であっても学生の顔を持っている、役割を持っていたり、あるいは事業所で働いていた、NPOとかそういったところでもボランティアその他で働いている、そういうふうな人たちによる市民だということが意識づけられることによって、そこから続く協働だとか、それから役割だとか、あるいは市民力というのは永遠に育ててはぐくんでいかなきゃならないですから、そのはぐくみもおのずとテーマがより鮮明になってくる。そうしないと、市民をはぐくんでいくという漠然としたものだと、一般住民的なイメージでの枠組みしか出てこなくなるおそれがあるんですが、実際には半分ぐらいの人口の人は何らかの働きを持っているわけですが、所得のあるなしにかかわらずです。そういうことによって、そのはぐくみも全然、そのプログラムといいますか、方向性、位置づけが変わってきますので、それをまず鮮明にすることは、この中身を充実するのには、構成するのには必要不可欠かなと思います。

そして、ここにも協働とあるんですが、内部の協働もありますけど、やっぱり市民との総合関係なんですが、我々経済界から言ってすごくいい協働の事例は一昨年のデスティネーションキャンペーン、観光のキャンペーンだったんですが、これは経済界から見ると非常に理想的な協働パターンでありまして、行政や市民との。まず行政のほうからリードしたそういうプログラムですが、それをいち早く経済界や市民の方々にこういったことをやる

から一緒にやりませんかという呼びかけがあって、それを主体的に受けとめて、やっている中で、一般の市民にまでそれが浸透して、単なる観光業界のお定まり事業ではなくて、これって非常に大事なまちづくりなんだな。

気がついてみたらここにも、2枚目にありますけど歴史・文化・伝統・自然、こういった都市の、我々のライフスタイルやそういったものと非常に密接不可分なことが根本にあるんだなということが気づきとして経済界も市民の方もあって、非常にユニークな、JRの言葉を借りると30数年やっていて初めてこういうパターンでデスティネーションキャンペーンやりましたという評価があるくらい、地域丸ごと、まちづくりも人づくりもそういった情報発信も全部総合的にやって、さらにそれが経済にも循環したというふうな、もちろん大きなテーマだったんですが、非常に我々にとっては理想的な行政その他との協働パターンがありまして、従来の協働というと、言い方が悪いですけども行政がこれを行うことにしたからやってくれみたいな協働、ではないですね、主体性のあるやり方というのは非常にあって、市民の方々も私たちも何かしたいとか自発的なものが相当いっぱい、高校生などからも出てきたりして、東華中学が自分たちの修学旅行をそれにしようということで首都圏の駅でキャンペーンをやるくらい。地域のそういう重要課題にかかわったというのは非常に、やらせではない形で協働されたということで、私どもにとって非常に誇りの持てる協働のひとつのパターンでありますので、そういったものを是非参考にして、協働というものと、それからはぐくみというものを視野に入れた形で、ここのところの中身を考えていきたいなと思います。

以上です。

大滝精一委員長

ありがとうございました。

じゃあ、江成さんよろしいですか。お願いします。

江成敬次郎委員

これまでの議論の中で共通して出された市民の役割とか位置づけということについて、こういう土壌を育てるというところに位置づけて、4本の木を育てると位置づけられているのは基本的に私も賛成です。

ただ、私がいつも感じていることなんですが、市民協働ということで何か形があったり、あるいはこの基本構想の中でこういうものということを示すことができるような段階にはまだ行ってないんじゃないかと私は感じています。ですから、これから10年ぐらいは少なくともそれを育てていくという、そういう期間なんだろうと思うんです。ですから、いろいろなパターンで市民の力をつけていくという、そういう期間と位置づけて、その成果や問題点をどういうふうにはかのところに広げていくのかというような、そういう仕組みを考えていくことがまずは必要なのではないかという気がします。

ですから、「行動する市民力」と言っても、それだけの市民力がこの10年で本当につけられるのかというふうなことについては、そう簡単ではないだろうと思っています。ですから、この10年間ぐらいではそういう市民力をつけるための仕組みづくりとか、あるい

はいろいろな経験をしていくというふうな、そういうことがやりやすくなる、あるいはそういう人たちが増えていくような、そういう仕組みづくりといえますか、そういったことが必要なのではないかと感じております。

大滝精一委員長

ありがとうございました。

(小野田委員が手書きメモを配布)

では、せっかく新しい図を書いていただいたので。

小野田泰明委員

皆さんの、先生方のご意見をまとめてどうしようかなということを考えたものなので、ご参考ということなんですが、もう一回確認をさせていただきたいというか、まだよく理解していないのもう一回問いたいのですが、この総合計画に一体何が求められているのかというあたりで、やっぱり役に立つ総合計画でなければいけないということだというのは先生方のお話でも認識できたんですが、では前々回の議論が何かで結構、ただの憲法じゃなくてアクションプラン型の総合計画というのがあるのかというお話をしたんですが、それでも、それで具体的には何が変わればいいのかと、人口減少とかアジアとの交流というのはなかなかやっかいでそう簡単には変わらないですけれども、行政のあり方とか、先ほど来、話に出ているNPOとの協働のテンプレートとか、そういうことは多分変えられると思うんです。特に市役所の中では、この憲法がしっかりすると、今までできなかった脱縦割りを非常にやりやすくなるというふうに使っていただければいいわけです。NPOとの協働も憲法にこう書いてあるから、こういうふうにやればいいんじゃないか、それはもう市のちゃんとした業務ですよと使っていただければいいですよ。

なので、外の話はちょっとわかりませんが、中の話としては横串と縦串と。横は脱縦割りで、何かプロジェクトベースでそれをフィードバックできるような行政の回しができれば、これを使ってできるといいかなみたいな話だったり、縦串としては大学、市役所、NPO、市民というあたりのインターフェースなり外部組織の構成がうまくいくといいかなということなのかなと思いました。

それで、これを拝見すると、これ自体はこの間も総合計画課長に話をしたんですが、うまく縦割りの縦軸に張りついていて、どうもここで議論されているダイナミズムがないのではないかと。4つ並べるとどうしてもそういう枠組みになっちゃうので、この4つはこの中の4つの丸、5つの丸がありますけれども、4つの丸にして、真ん中に「行動する市民力」というのが入って、何かわかりませんが、4つぐらいの縦割りの話があって、左上から言うと産業、外交、次世代とか大学とか、時計回りにいくと郊外、都心の話、あと高齢化と少子化の話という、それぞれすごく大事なことがくっついてはいるんですけれども、それをまとめる「行動する市民力」があって、それとはちょっとモードが別に、ここにも書いてあるんですが活用する資源という話が出てくると。

それを4つのキーワードで切り取るときに、その木だけをこれが4つですよ、健やかな暮らし、自然との共生、世界に生きる東北の力、未来を築く学びの都という4つを書く

んじゃないくて、せっかくだから、行動する市民力とか、資源を生かす云々みたいな、そういうその構造自体をもう一回引っ張り出すような、ローマ数字ですけど、4つの軸の立て方というのはできないだろうかということを少しご提示させていただきたいと思っています。

は要するに「行動する市民力」の読みかえですけど、仙台型市民参加モデルみたいな話を掲げて、は固有の資源を生かしますという話で、杜の都ですけど、は世界・未来に開かれた仙台で、は安心して生活できる都市、安心して生活できる環境づくりみたいな、そういう話で、要するに基盤の部分を切り取って、真ん中の部分を切り取って、4つの杜は2つずつセットにして絡めとると。そうすると、何か左側はコミュニティで右側は都市で、上はアクティビティーで下は自然でとか。

の仙台型市民参加モデルは、名前をもうちょっと練らなきゃいけませんけど、「行動する市民力」をとして掲げて、それがドライビングフォースになってさっきの横軸とか縦軸がどんどん変わっていくと。は杜の都の話で、これは仙台のアイデンティティーになるんですが、単に自然の話とかだけじゃなくて、文化とか経済とか人材を含んだ幅広いアイデンティティーの話として位置づけて、は先ほど来、話をしているアジアとか世界とか次世代とのインターフェースというふうに書き下せて、は生活基盤とか地域福祉力の、非常に真っ当だけど、地味だけどすごく大事な話として書きました。

何か健やかな暮らし、自然との共生というこの枠ではない別な、もうちょっと違う次元での4つというのは書けないのかなと。行政的には自分のところのプロジェクトが項目の中にしっかり下りていって、こういうふうにクロスになっちゃうと、とにばらばらに出てきたりとか、おれのところは一体なのかなのかみたいな話になって非常に整理しにくいから、多分こういう話に落ちつくんだと思いますけど、こうなっちゃうと、一番最初に話した、下を書いてある総合計画に求められている横串とか縦串の、「Change?」と書いていますけど、チェンジが、本当に今度つくるこれを使って実現するのかなという疑念がちょっとあるんです。だから、無理なら無理というのをはっきり言ってもらってあきらめさせていただきたいんですけれども。

西大立目さんとか先生とかが盛んにおっしゃっているような行動型の、もうちょっと縦割りやめようよみたいな話が、これに何かなかなか書きにくいというか定着しにくいんじゃないかなと思っていて、それだったら最初1番ではっきり書きちゃって退却できないというか、政治的には結構リスクなのかもしれませんが、すごいイノセントに言わせていただいていますけど、そういうことももしかしてありなのではないかと私自身は思ったりもするので、いやそれは甘いという形で、もうちょっとこうじゃないかと、率直な、今日はせっかく会長もいらっしゃっていますので、議論をできればいいかなと思った次第です。

大滝精一委員長

ありがとうございました。

小野田泰明委員

すみません、何か話を戻すようなことをして。

大滝精一委員長

どうしようかな、少し皆さん考えてください。

小野田泰明委員

大滝先生、すみません。

大滝精一委員長

いやいや、それは構いませんから。

小野田泰明委員

すごく悩んだんですけど、何かこんなこと言うとまたよくない……。

小松洋吉委員

もうちょっと早く出してくれればよかった。ごめんなさい。

小野田泰明委員

課長は、この間来たときにこのドラフトみたいなやつは書いたんですけど、いやそれはちょっと市として、まとめるの難しいですねと言われたので。

小松洋吉委員

私は「行動する市民力」をこの計画策定のベースに据えるということについては賛成です。

先ほど、柳井先生からも地域経営会議という、名称がいいかどうか、私は大変いい表現だろうと思うんですが、そういう仕組みのひとつとして私はとらえたんですけど、そういう意味ですか。

柳井雅也委員

プラットフォームという意味ですね。

小松洋吉委員

そういうのを具体的な政策のところに落としていくのか、それとも最初にするのか、ちょっとそこら辺は私にはどうしたらいいかはわかりませんけど。

柳井雅也委員

地域経営会議という表現がはばかられる場合でしたら、市民と例えば行政との総合構成を確保するとか、あとちょっとおしゃれな言い方をすればプラットフォームという言葉になりますけれども、そういう表現でにじませておくという方法はあります。

小松洋吉委員

私は、ちょっと勉強不足かもしれませんが、21世紀型市民というのはやっぱり自立した、自分たちのことをできる限り自分たちで考えてやっていくというのが基本なんだろうと思います。それをオープンとクローズでということだろうと思うんですが、まずひとつは、やっぱり21世紀型市民育成ということですから、いろいろな課題がありますけれども、いろいろな活動をやっている団体等もあります。私は結構育ってきているのではないかなと。もちろん今後育てていくということもひとつの政策としては必要だろうと思うんですが、育ってきていると。それらが市内、県内、県外、それからもう少しグローバルにつながっていくということも大事だろうし、そういうところのネットワークを進める意味でもコーディネーターの育成みたいなのも、具体的な政策はないかもしれませんが大切なんだろうと思います。

それから、これも政策の中でと思うんですが、何かひとつ、例えばですけど、思いつきですけども、市民総ボランティアの育成とか、例えばですよ。育成するというのは何か政策としてはそういうこと、そして先ほど大変いいこととか共感を得たのは、大滝先生から、行うことによって自ら考え、学び、自分を育てていくという、そういうのもやっぱり21世紀型市民の中に入ってくるんだろうと思います。

そういう意味で、「行動する市民力」という、私は表現は極めて適切なのではないかなと思っております。ですから基本的には小野田先生のこれをもう少し先に拝見していれば、大変これも、もうちょっと大きくかいてくれるとわかりやすいのですが、非常にダイナミックな感じがしますけれども、基本的にカラー刷りの資料3に私は賛成です。

大滝精一委員長

ありがとうございました。

小松洋吉委員

こちらが悪いと言っているわけじゃ決してありませんので。

小野田泰明委員

いえ、ものが違うので。

大滝精一委員長

少し、小野田案についてはもうちょっと後で議論しましょう。

一通り、今、論点1について主にご意見いただいたので論点の2のほうを。論点2のほうは、実はまたその中がかなりたくさん入っているので、どこから議論していただいても全く構わないんですけども、4つの項目があって、そのどこかに近いようなご意見を少し、もうちょっといただいたほうがいいのかと思います。

大村虔一会長

先生、論点１でもうひとついいですか。

大滝精一委員長

どうぞ。

大村虔一会長

僕は、計画というのは実現するためにつくるものだと思いますので、構想というのはかなり遠くのほうに、あっちのほうに行こうというのを決めるんだけど、計画というのは必ず実現していく、そうすると目標を決めて、決めた目標にどこまで達しているかということとをみんなで推し図りながら、もっと進めようとか、いいところまで行ったぞという感じを持ちながら進むということが、それは市民とともに協働でやっていくということを考えると、その目標を立てるのが行政だけではきっとなくて、市民にもわかりやすい目標、あるいは市民自らが参加して目標をつくるというようなことがあって、その目標が達成できるかどうかというのは、僕は滝先生と、県のプロジェクトがどこまで進んだかという話をチェックする県民満足度調査とか膨大なものを横で見ていたんだけど、やっぱりああいうのじゃなくてもっとわかりやすい指標でみんながわかって、ああうまくいっているなとか、ここはちょっと予想していたのと全然達成度が違うぞとか言えるような仕組みを何かつくらないといけないのではないかという気がするんですよ。

市民の目線でつくった目標というのが、得てしてその自分の生活からにじみ出てくるために、あまり目標レベルが高くなかったり短過ぎたりするということが起きがちなわけだけれども、なるべく、今、市民が抱える問題というものをみんなに知らせていく努力を、多分これは行政側がしなきゃいけないんだろうと思うんですけども、行政あるいはNPOが、どんな問題がどんなふうにあるのかといったことを知らせていって、そういうのを自分の実生活の場、体験だけじゃなくて、幅広く知りながら意見を出していく市民の数を増やすといったことがとても大切なと思いますので、今までは市民に情報を差し上げるというのは、カラーで印刷したものを配ったりというようなことでなかなか大変であったわけですけど、最近はコンピューターのネットワークがどんどん進んでいますから、若い人はほとんどそういうものでいろいろな情報を得たりしているということがありますから、少なくとも、高齢者にとってはまだ問題がありますが、若い人同士にとっては、そういう情報を提供しながら意見を考えさせていくというか、そういう仕組みはとても重要になってくるかと思ひまして、今まで以上に、市は随分一生懸命情報を出しているわけですが、わかりやすい情報をどういうふうに出していくかということに取り組むなんていうのはとても重要かと思ひます。そういう意味では、この「行動する市民力」を引き出す力というのがその辺にあると。

それからもうひとつ、市民力、市民側が何かやろうとすると、やっぱり行政の枠組みとは随分違う目線で物事をとらえるわけで、何か発言するとみんな幾つかの部局にまたがってしまうような話が起きてきて、例えば市民の目から見ても、今、つくっている東西線の一番町の地下鉄駅のあたりがどんなふうになったら仙台市にとっていいかね、市民にとっていいかねというようなのは、その隣にいるお店の人と鉄道だけの話ではなくて、もっとみ

んなの意見を集めてつくれる仕組みがあるはずだと。それがうまくなかなかできにくい、地下鉄は予算があって、この予算の中で何とかしなきゃいけないとか思いますから、なかなかほかの人から余計なことを言わせないように配慮せざるを得ない。その辺を、市民側から参加するととても残念に思うんです。そういうのをまとめる仕組みというのが多分行政側には必要になってくるのではないかと。

その行政側が仕事をしていくシステムと、それから市民側の思いというのをつなぐ仕掛けが、それは行政側にあったらいいのか、市民側にあったらいいのかわかりませんが、その辺がかなりキーになるのではないかと思います。

柳井雅也委員

大滝先生、よろしいですか。

多分これ、1番目と2番目につながっていくことだと思うんですが、今、大村先生が言ったのは、私が最初に言った地域経営会議という表現がそれなんです。だからそこは第三者組織にしていろいろな提言を行っていくと。つい最近まで仙台に研究所がありましたよね、都市総研みたいな。だけどああいうような学術的なものじゃなくて、もっと市民の目線に立ったような研究員を少し配置して、そしてそこにいろいろな人たちが参加できるようなプラットフォームを考えていくというやり方がひとつあるんじゃないかと思っております。

それと、これはどこでお話ししたらいいかなと思っていたんですけども、多分2にもかかわってくると思うんですが、ある程度数値目標というんですか、定量化できるものについては数値目標化をやっていくということをどこかに言っておいたほうがいいんじゃないですかね。これはいろいろなデータで、例えば生活保護世帯を何年後にはこのくらいまで減らしますということとか、定量化できるものについてはそういう検討を少しして、もしもこれを文書化できないのでしたら、我々の中で共通認識としてそういうことを考えておいて、当然、さっきのPDCAサイクルにもかかわってきますので、それをちゃんと活用していくというふうに、そういうところまでちょっと落とし込んでおく必要があるかと思います。

あともうひとつは、人口についてのシミュレートの仕方です。仙台市では単純に、多分、コーホート要因効果が何かで出てきて、いろいろなシナリオをつくってきたと思うんですが、さっき私が言いましたように交流人口の問題とか、あとちょっと予測はなかなか難しいんですけども、そういった仙台の周辺地域の経済力を巻き込んだ再編成ということ考えた未来の都市像というのを考えていった場合、本当にこういった、とまっている人口で見ちゃっていいのかなという。

これは実は派生的には、いわゆる地域経営会議のような組織体にもかかわるんですが、仙台というのは人がものすごく動くんです、全国的にも、これはトップランクの動き方をするんですけど、学生もすごくよく動くんですよ。こういったようなファクターもやっぱりどこか考慮しておかなくちゃいけないんじゃないか、仙台らしさというのを出していく場合。

そういった論点が実はこの2の中にも何かいろいろ入ってきているのかなと。あと、東

アジアについても、観光は観光、工業は工業、学術は学術だけという考えじゃなくて、これをやっぱり融合していくということで。実は小野田先生がつくられたメモというのは、これは我々が考えるときのベースにはなと思うんです。表に出せるかどうかはまだ議論の余地があると思うんですけれどもすごく便利なメモで、だから、僕もこの資料3の図を見ているとやっぱり木がダブって見えるんです、レンズのように。重なって見えるんですよ。だから、市民目線でいくと多分そこで、こちらのほうはどちらかという役所の人たちが見たような整理の仕方かなという感じがしております。

ただ、僕は課長さんとも一度お話しさせていただいたとき、実行可能な妥協、肯定的な妥協という意味で僕自身が了解して、この組合せとか融合という図が入っていたんです。そこで僕はよしとしたわけでございます。

また細かいことがありましたら、意見を言わせていただきます。

小野田泰明委員

ちょっとだけ、全然別の話ですけど、今、柳井先生の話でちょっと思い出したんですけども、今、鶴ヶ谷の再開発計画のお手伝いをさせていただいて、町内会を中心としながら、団地全体の方々と一緒に新しいまちをどう運営していくかと。市営住宅700戸集めるわけですから相当恐ろしいことが起こるんですよ、本当は何かこれ自体、結構危険なプロジェクトなんですけれども、政策的にはやらなきゃいけないのでやっているんですけど。

そうすると、やっぱり町内会はすごくやる気があって頑張るんですけども、NPOに参画してもらわなきゃまずもたないだろうという話にはなっているんですが、NPOもボランティアでは無理で、やっぱり継続可能な仕組みをつくるためには、財政的裏づけでコミュニティビジネスという形でそこにお金を投入しないと回らない。じゃあその裏づけをどうするのかと。行政が持っているお金を一部アウトソーシングして、そういう仕組みにつくっていくのかみたいな財政的な話と、もうひとつは、既存の町内会というのは、限界がある組織ではありますが、やっぱりちゃんと根づいていて、非常にしっかりとしたボランタリーな活動されている会長さん方がいて、そういう資源、既存の資源とどう結びついていくのかということがやっぱり非常に重要だというふうに感じております。

そういうことがあぶり出されるのは、ひとつ、プロジェクトベースで何か物事が起こったときに、いろいろな課題がわかって、いろいろな解決策が具体化して、また、プロジェクトベースなのでみんなもやらざるを得ないというか、本気にならざるを得ないので、ものを新しく建てるというのは結構大きい話ですけども、何かソフトの家庭菜園プロジェクトをやるとかそういうのもいいと思うんですけども、そういうプロジェクトベースでやるときのパブリックインボルブメントの仕組みというのは、これはかなりアメリカなんかでも発達しているので、是非仙台市でも先駆的に取り入れたらいいんじゃないかという話と、ただNPOを活用するといっても財政的な裏づけ、アウトソーシングの枠組みがなければ意味がないということと、3つ目は、町内会という既存の仕組みとこの新しい21世紀に向けた計画がどういうふうな関係性にあるのかというあたりは、「行動する市民力」という意味で非常に重要ななと思いました。

西大立目祥子委員

やはりコーディネーターの存在というのがどうしても必要なんだと思うんですよ。それはまだ仙台の場合は育っていないというか、それとやっぱりNPOはボランティアだけでは続かないと思うので、小野田先生がおっしゃったように、そこをどういうふうに解決するかということのも大きいと思います。

小野田泰明委員

コーディネーター、膨大な数が要りますよね。いろいろなところでいろいろなプロジェクトが起こっているから、本当にコーディネーターの数を倍増、10倍計画とかすると、NPOの裏づけみたいになる。

現場をちゃんとカリキュレートしていくということが大事で、研究をしてこうなんですよとペーパーとしては書けると思いますけれども、そういうのは結構みんなわかっていて、民度が割と高いから、鶴ヶ谷のような郊外団地でもすごく町内会の会長さんが賢いと言ったら怒られますけど、すごくよくわかっておられるんです。

ただ、これだとあの人は言うこと聞いてくれないとか、これそのままやってもあの人は難しい、うち滞納率何%だからみたいな話になるんですよ。それをどうやってつぶしていくかというのは、今、西大立目さんがおっしゃったようなコーディネーターの活躍だったりとか、NPOが本気になってやってくれるとかということで、そこら辺を行政がどこまでサポートできるかというフェーズに、もう仙台は来ているような気がしました。

小松洋吉委員

今のような話は大変重要だと思うんです。ですから、具体的な政策のところで考えていくというのではどうでしょうかね。でないとこれ、次は恐らく3月ですか、行われるのになかなか提案しにくくなってしまうと。具体的な政策のところで、今言ったようなことが大事だと思うんです。

柳井雅也委員

今、小松先生そういうふうにおっしゃられたんですけど、理念とか何かを考えていくというのは、具体的な事実を媒介にして考えていきますので、僕は議論自体に意味があったと思うんです。

ただ、やっぱりこうしてお話ししていくと、人口については動く人口と、とまったままの人口というのがあるんです、地域的に見ると。そうすると、そういう意味では何か施策とかこういったプランを考えていくとき、この二面展開をやったりきちっと図っていかないと、どちらかに偏ってしまったのでは片方はどうなるのという話になっていくようなそういう気がしました、今の話を伺ってしまして。

大滝精一委員長

今、いろいろな形で、大村先生は行政システムと市民の目線をうまくつないでいくとい

うような話もあったと思いますし、それから、先ほどのコーディネーターとか、人によってはファシリテーターという人もいるし、いろいろな言い方をすると思うんですけど、そのところがすごく重要なかぎになっているという。かなり大胆にそういう人たちが行政のシステムの中にかかわりを持ってくるとかということであまくつないでいけるかどうかという、恐らくそのくらいのことは今度の基本構想の中に書き込まないと。具体的に何をやるかという話はまた別問題として、何かそういうことはきちんと書いておいたほうが私はいいという感じはするんです、基本構想の中にも。そのあたりのところは非常に重要なところかなというふうに思うんです。

小松洋吉委員

それは賛成です。

大滝精一委員長

ありがとうございました。

ちょっとその、かなりの部分、今、論点2のところに入ってきているんですけど、先ほどから言っていますように論点1と論点2はきれいに切り分けられないので、ただ、時間もそんなにたくさん残っていないので、少し論点2のほうで議論しておく、あるいは皆さん方の中で少しご意見いただけるとありがたい部分がたくさんあるので、その辺についていかがでしょうか。

柳井雅也委員

委員長さんにちょっと確認したいことがひとつあったんですが、東西線の位置づけです。この基本構想の中に、例えば東西線という表現が入ってくるのかどうかによってちょっとこの扱い方が変わってくると思っているんですが、そのあたりはどうお考えですか。

大滝精一委員長

微妙な問題ですね。だから、東西線のもたらすインパクトそのものを、50年くらいというか、2050年くらいのところまで視野に入れて書くという書き方と、それから当面、もう5年後には開通するわけですから、そのあたりのところで具体的に書いていくといったときに、多分書ける中身は、私はむしろ総合計画の中でいろいろなことを書いていくということのほうが書きやすいという感じはするんですけどね。

ただ、そうはいっても東西線によってかなり仙台市のまちの骨格がもうでき上がって、その後大きな投資は起こりませんから、基本的に余り。そうすると、東西線が通った後の骨格の中で何ができるかみたいな話は、基本構想の中にも一部はちゃんと入れておかないとまずいかなという感じはするんですけど。

柳井雅也委員

そうしますと、コンパクトシティーという表現の中でやんわりということになると思うんですが、いわゆる仙台を中心とした環状道路と東西線が26年、27年あたりに完成して

きますよね。今までこの東西線の中の論点で抜けていたのは、今まで駅同士の連携であるとか地域の活性化のためにどう使えるのかという、こういう話だったと思うんです。

ただ、もうちょっと一押し、二押しを考えていくと、やっぱり生活コストと、あともうひとつは生産コスト、ビジネスコストでもいいと思うんですけれども、これを圧縮する効果があるということをどこかで強調したほうがいい。これは書き方としては、コンパクトシティーになっていくとそういうことが可能だという書き方で結構だと思うんですけれども、僕は富山のほうでLRT関係の仕事をやっていて、コールセンターみたいなのが張りついてくるんですよ。聞いたら、駐車場が節約できるというのでみんな通勤でやってくれるから。あと、CO₂削減で会社にとってもそれが宣伝効果、いわゆる社会的な責任を果たせるというのでそういうのが張りついていく。そうすると、今度そういった業者が張りついてくると産業集積の効果が働きますから、食事する場所から始まっている張りついてくるわけです。そういうのがひとつ抜けていたと。

あともうひとつは、前も言わせていただいたフードデザートという形で、買い物に行けない人が行けるようになってくる。例えば半径200メートル圏内に住んでいるお年寄りの方が東西線を使うと一番町まで買い物に行けるとか、あと、いろいろちょっとうわさで聞いていると、ある駅の近くには産直、地産地消のものが置いてあったり、自動車がずっと並んでいるんですが、新駅ができるとそこにまで買いに行けるようになるとか、そういう何か生活面でのコストとか、あと利便性というのが増すということがあって、だから、そのコンパクトシティーの売り込み方ですよ。単に何か行政的にこのくらい節約になるから負担が減ってという話じゃなくて、もっと生活者目線からのコンパクトシティーのよさというものを訴えていくと。そのとき、鉄道とかそういう交通体系は大事じゃないのということとどこかににじませておくという、そういう記述の仕方はひとつあるのかと思いました。

大村虔一会長

その話は地下鉄をつくる时候にも、地下鉄の話だけでなくまちづくりとリンクしたものにしようという話で始まっているんですけれども、実際は地下鉄は地下鉄、まちづくりはそれぞれ、それが最初にリンクして進めるというのを決めたときの懇談会だったか何かわかりませんが、そのときの雰囲気とはその後は随分違っている。それはいろいろな行政のシステムだとか、そういうところにいろいろ問題があると思うんです。

その市民の参加の仕方も、その後は市民といってもその地域の本当に地権者の話しなくなってしまう。つまり、そうでない計画づくりが、多分この絵に近づけようとする必要があると思うんです。

柳井雅也委員

だから、その受皿としてまちづくりをちゃんとやれば国際化も当然進んでいくでしょうし、今、言ったその生活の利便性も増していくだろうし、あと、そういった文化に接する機会も増えていくだろうしという、何か都市づくりがすなわち4つの木をきちっとリンクさせていく、そういう力強さがあるんだよということをこのコンパクトシティーの中には

ちゃんと訴えていくといいと思います。

小野田泰明委員

問題意識として、そういう外部経済がちゃんと内部化されるかどうかというのは、プロジェクトベースになると、大村先生ご存じですけど、それぞれのステークホルダーは、そういうことはお構いなしに短期経済をどう最大化するかというゲームになっちゃうんですよ。そのゲームをどうやって解消するかというのが多分行政に求められていることで、それは外部経済がこんなにすばらしいですよって啓蒙することでは、僕も大村先生ほどじゃないけど相当現場でたたき上げられたので、どんなにきれいな絵を描いて、絵は大事ですよ、絵は大事だけど、やっぱり最終的にはコーディネーターの粘りであったりとか、そこにどうやってコネクションするかという仕組みだと思うんですよ。

なので、こういうふうに仕組みを変えるというぐらいい歩進めないと、永遠に、これを書いたって、多分都市計画関係の部局としては市民参加を派手にやるというのは攪乱要因以外の何物でもないですから、ステークホルダーは全部損するわけですよ、それで時間はかかるし、投資に対する見返りも、ちゃんと出資者に説明するのに、今度市民参加するからそれでどうなるかわからないって言ったら、だれもそんなリスクがあるような案件には出資しませんから。そうするとみんな損するような仕組みだからだれもやらないわけですよ。そのリスクをだれかがとる必要があって、それは行政がある部分とる必要があるんじゃないかと。行政もそんなに余裕があるわけじゃないし、非常に財政的にも厳しい状況にあるから、ある部分はあるけど、ここからは民間でもとってくださいよ、若しくは地域でもとってくださいよとマッチングファンドみたいにしなきゃいけませんけど、そういう僕は現場で鍛えられて思うのは、本当に支援する枠組みがない。

本当にスタンドアローンで、それは大村先生はそれを何十年も続けてこられたわけですけど、大村先生がこんなにがんばっても、何も変わっていないということはないけど、相当よくはなっていますけれども、現場は本当悲惨ですよ、本当に悲惨。それでも何とかしようと思って西大立目さんが頑張っていたり、僕もやっていたりしますが、やっぱりそういう人たちにちゃんとエネルギーを供給して、その人たちが個人的には大事なことからやらなさいよ、みたいなことで押されてやるんじゃないくて、ちゃんとリスクヘッジできるような仕組みをきちっと行政体が持つべきだと思います。それは啓蒙じゃないと、冷静な仕組みづくりだと。

外国とか行くと本当にそう思うけど、その仕組みが、今、つくられていないと、高度経済成長の余力のある、今、つくれていないと、この先、多分次の世代は、僕たちはぎりぎり逃げ切れるかもしれないけど、結構つらいですよ。なので、こういうことを言いたいということがあったし、せっかく市民参加というのが出てきたから、それを最初に掲げて総合計画でやったらどうなんですかねみたいな、イノセントなことをあえて申し上げたんですけど。

間庭洋委員

同じようなことが東北でも起きているんです。例えば新幹線が今度青森で 12 月開業し

ますけれども、直接的には青森か北海道南とか北東北ぐらいのテーマのような位置づけになっているんですが、関係者は知っているんですが、実は八戸のときもそうだったんですが、率としては当然そこのご当地がものすごい率で伸びるわけですが、では交通量の断面で見たらどうなのといったら、圧倒的に八戸のときも量の断面で増加したのは絶対数が仙台、東京間なんですよ。ＪＲとかその他の関係者も、今回の青森、新青森開業で、伸びるのは当然函館とかだけれども、ボリューム絶対量でいったら仙台、東京間が圧倒的に伸びると見られているんですが、でも、今、新青森開業というのは北東北あるいは青森県かせいぜい青函ブロックの固有なテーマに見られているんです。非常に矮小化されているんです。

例えば前にもお話ししましたが、そういうプロジェクトが結構いっぱいありまして、今回のセントラル自動車と秋田港を結ぶシーアンドレール、ロシアとか、そういうのがいっぱいあって、それは秋田とか青森などの地域固有のものじゃなくて、やはり東北全体のものであって、しかもそのリードすべき仙台的な経済界なり行政なりの役割は非常に大きいんです。それをどのように東北全体としてとらえて、みんなでどういう仕組みでもってそれを生かすか、あるいは将来像をそこを契機に描いていくかということは、地域づくりやいろいろな雇用機会だとか経済、それから将来の東北像というのを描くときに欠かせない視点なんです。今、小野田先生が言ったのと本当に根っこは同じ問題なんです。

そのときに、じゃあといったときにやっぱり仙台なんですね、リードするのは、そういう大きな問題は。例えば、北海道においての札幌の話がちょっと出ましたけれども、北海道で札幌以外の方は、学校を出て就職しようといったら札幌か北海道外、特に三大都市圏とこういう選択肢なんです。大きなストライクは。だからそれは北海道民にとっては喜ばしい構造ではないので、東北も同じようなことが言えますので、やはり仙台が東北に対する役割をしっかりとやっていくことによって、ここの２の中に完結していますけれども、あると思うんです。それはさっきから出ているファシリテーターとかという役割もありますけど、もうひとつは、宮城や東北に対する仙台的な役割の大きさは人とか地域をつないでいくネットワーク力、そのファシリテーター的な能力も必要ですけども、そういうものが、今、なくてぶつ切れ状態なんです。

例えば、東北６県といったって、県同士は対等ですから、そんなにお互いに一緒にやりましょうという、よほどの自動車産業みたいな吸引力のあるものについてはなるんですけども、さっきの新幹線とか青森のものについてもやっぱり、ああそれはあんたのところのテーマだね、みたいな意識になっちゃって、発展性だとかダイナミズムが全然出てこないんですよ。ですがやっぱりこれ、シーアンドレールの秋田なんか考えると、明らかにもう日本における自動車産業のグローバル展開の話なんですよ。それを東北の足元が、それは秋田の課題だね、みたいにとらえたら、全然めっちゃくちゃな話になっちゃって、これはやっぱり仙台的な役割が非常に大きいと思って、我々もちろん会議所ベースでは参加して、応援しているんですが、こういうものが、さっき小野田先生がおっしゃったものとまるきり同質のものが東北の中における仙台的なポジション、役割、構図としてはこの２番の中にも非常に横たわっています。

例えば、東北大における留学生の課題、さっき出ましたけれども、私も実際に、仙台に

是非中国の総領事館を置いてほしいという要請に県、市の方々と行ったときに、外事のナンバー２で出てきた方が東北大卒なんですよ。留学生ですけど。そういった方が実際にいるんですね、すごい中枢のところに。そういうことは県も市も我々も、行って紹介されるまで、本人が言うまでだれも知らなかったということは本当に恥ずかしいんですが、いかにやっぱりそういう人のつながりだとか、知のつながりとかそういったものを大事にしてこなかったな、この方向性、延長線上では将来の姿はたかが知れたものしか描けないなということを非常に反省したんですが、そういったことは、非常にこの２番のところでは、これらの項目の間をつなぐものとして非常に重要なものがあるなということをつくづく思いました。

以上です。

大滝精一委員長

ありがとうございました。

柳井雅也委員

ある民間ディベロッパーのいろいろな地域開発を行う担当者とお話ししたら、我々の世界で言う空間立地論の話になって、むしろ東北というものを山川をなしにして均質な空間としてとらえると、現状の交通体系を前提にすると最も有利な都市というのは盛岡だという話をしていたんですよ。

だけど、現実的には仙台なのはなぜかという話で、少し意見交換したんですが、やっぱりそのところで出てきた結論めいたものというのは、人の多様性なんですよ。量は当然あるんですけども、やっぱり多様性が保障されているというところに仙台の魅力があって、今、間庭さんがおっしゃられたような大学の存在というのが、どうも我々はそういった地域への価値移転がへただったんじゃないかという感じがするんです。つまり、人材をきちんと地域の中に引きずり込むような積極的なアクションがなかったし、あと、育てるだけでなく、そういったうまく人を活用してその次の成果につなげていけるようなシナリオづくりもやってこなかったということで、また１番目の議論に戻っていくかもしれないんですが、もうちょっとその辺を正面にとらえていくと、さっき言った人、NPOとか、あとボランティアとかコーディネーターとかというのをどうしたらいいのかというのが見えてくるんじゃないかという気がします。

大村虔一会長

次の状況を考えるときに、国際的な交流なんていうのがどんな形で行われるかという話の中で、やっぱりこれまでは成田とか関空とか何か、行ってからどこかに行くみたいな話なわけけれども、機能としては、仙台から飛び立ってあっちこっちに行っておかしくはないんですよ。おかしくはないけれども現実にはそういうのは起きなくて、鉄道も悪戦苦闘しておるし、もっと活用されていない。ですから、本来 100 万ぐらいのコアがあって、背後に東北があれば、港も空港ももう少し活性化して文化的なイベントだとか経済的なイベントだとか、いろいろなものが行われて人がやってくるといったような話があって不思議

議はない。

だけでも、今まではやっぱりちょっと内向きであったということもあって、福岡だとか何か見ると、圧倒的に経済的なイベントなんて少ないわけですよ、学術的なイベントが少しありますか。だから、その国際的な動きのようなものが恐らく仙台を中心にしてつくっていけるはずなんだけど、その資源がまだ生かされてきていない。

そのためには、間庭さんの世界もそうだし、大学もそうだし、あるいはもうちょっと文化的な、仙台市は随分果敢に文化的なイベントをやって、チャイコフスキーのコンクールをやったりしているわけですけども、そうしたイベントと市民がやっているストリートジャズフェスティバルみたいな話がどんな形で全体像をつくるのかというのは、なかなかイメージが固まらなかったという部分があるんですよ。もう少し何かそういうのを戦略的にみんなで市民が考えて、ここの「行動する市民力」というところにつなげることができないか、それをつなげるには何が要るのかといった話ですよ。まだまだやれることがいっぱいあると思うけれども、なかなかそのところにいていないというところに課題があるんじゃないでしょうか。

それから、東北の人も、やっぱりみんな、福島は福島で関東を向いているし、空港も、要するに、東京の第三空港みたいなのが必要ならばこれは福島だというぐらいであそこに空港をつくるとか、だけどそれも苦戦していますよね。あっちやこっちでみんないろいろなことやったんだけど、みんな苦戦しているんですよ。それをやっぱりもう少ししっかり使っていくには、仙台がしっかりして、その人たちにとっても使いやすいような空港にするとか、そういう仕組みをちゃんとやっていないということにあるんじゃないかという気がしてしょうがないんですけどね。

間庭洋委員

幸か不幸か、そういう余裕がお互いになくなってきましたから。

大村虔一会長

なくなってきた、そうなんですよ。

間庭洋委員

みんなで沈没していくのでは大変なので、何とかそれを、今、おっしゃるようなことでもってやっていかなきゃならないですね。私は、個人的には東北6県庁所在市の政策会議みたいなものがあって、ちゃんと、県同士だといろいろあるんですが、市同士の身軽さでそういった共通する東北一円の政策課題というのをしっかり話し合って、どうしていいかということ、オピニオンなり行政のリードを果たしていくことも、非常に仙台市では求められるんじゃないかと思いますけれど。

大村虔一会長

東北全体のそういう大きな網目もあるし、その仙台と、宮城県内あたりにある小さな拠点ですよ。そういう小さな拠点の役割をしっかりやっぱり意識して、仙台市がそいつを

食っちゃうんじゃないくて、やっぱり仙台市が支えるべき部分と、その小さい拠点が支えるべき役割みたいなものが連携されるような格好になるとおもしろいんですけど。

間庭洋委員

結局先生おっしゃるように、さっきの新幹線の例じゃないんですが、一見アドバルーンが上がるのは青森なんですけど、実をとるのは仙台だみたいな構図が結構あるんです、いっぱい。

ですから、私は何をやっても仙台一極集中じゃないかみたいなことはよく批判を浴びる面もあるんですけど、そうじゃなくて、やっぱりお手伝いすると、東北全体のために、そういう姿勢をどんどん出していくことによって、それが何らかの形で循環したり、仙台にも還流していくという、経済や地域や人のつながりを持っていく構図を仙台の役割として意識してやっていくべきだというふうに、理念的には思うんです。いっぱいそのネタはあります、具体的に。今の空港問題もそうですけど。この間、私どもでやったお祭りのネットワークもそうですけど。素材はたくさんあるんですね、この歴史・文化・伝統・自然、その他産業だとか大学だとか、いっぱいあります。

都市像という、つい例えば、一番下のコンパクトシティみたいな、足元のイメージの都市像というのもあるんですけど、やはり外への役割も都市像のひとつだと思います。

柳井雅也委員

要はその基本構想の中に、オープンシステムにしていった場合にどういうふうに書き込めるかということだと思うんですよ。貢献しますとやってしまうと、何か仙台だけ勝手にやっているんじゃないかみたいな話になってしまうので、そこですよ、どういうふうに。そこは恐らく 10 年前の基本構想との違いになってくるんじゃないかという感じがするんです。そのところを少し絞っておけば、あとは見えてくるんじゃないですか、いろいろなものが。

大滝精一委員長

その書きぶりを少し考えなきゃいけないですけどね。

それから、10 年前と比べて、先ほど間庭さんから話があったように、とにかく仙台だけでなくほかの県とか市町村も、もうそんなに余裕がなくなっているの、いい言い方かどうかかわからないけど背に腹はかえられないみたいなことが一方ではあって、そういうものとも絡めてもっと切迫感が強くなってきている。そこでお互いに知恵を出して、でもそれをじゃあだれがイニシアチブを握ってやるのといったら、やっぱり仙台がそこで出てこないことには、みんなが沈没していっちゃうという危険性、そういうリスクがすごく高まってきている。今、やらないと沈んでいくばかりだというそういう話、それはだから、言葉で言っちゃうと何かあれなんだけど、そこを上手にやっぱり書かないといけないと思うんですけど、そういう話はあると思うんです、ストーリーとして。

ほかにいかがですか、この論点 2 はいっぱいあるんですけど。今、主に仙台の果たす役割とか、それを内向きだけでなくもうちょっと外、東北とかほかの地域との間のネッ

トワークとか連関性みたいな中で仙台の果たす役割みたいなものなんか。10年前に比べてもっと切迫感があるし、格段に高まっているということもあるし、東北全体が沈んでいっちゃうという、そういう状況の中でやるべき意味とか内容はかなりあるんじゃないか、あるいは素材もたくさんあるんじゃないか、そんな議論がずっとあったと思うんです。そこはやっぱりもっと強力に書き込んでいくということが必要かなと思います。

柳井雅也委員

もうひとつ考えなくちゃいけないんだろうなと思っているのは、外国人。こういう表現がいいかどうか分からないんですが、要するによそから来られている方をどういうふう到我々の都市づくりとか、あと普段の都市経営の中に参画させていくのか、あるいはプレーヤーとしてちゃんとお互いに総合構成の意見交換ができるのかとか、そういう位置づけが今までの計画ではなかったんで、ここをもうちょっとやっぱり考えていく必要があるんじゃないかというのを僕は先般から見ていたんですけど、そのあたりはいかがでしょうかね。

大滝精一委員長

これは小野田さんも感じていると思うけど、大学としてもすごく弱いんですよ。あんな1,000人も、私の大学なんか来ているんだけど、結局みんなほかの人たちはそのままスルーして帰っていっちゃってあとは知らないという。先ほどの間庭先生みたいな話、行ってみたらびっくりするみたいな話ばかりなんです。

柳井雅也委員

東北大ですと規模が大きいからなんですが、例えば私が前任で勤めていた富山大学ですと、留学生を全部組織するのは難しいですよ。ところが、県とか市が音頭をとって、人口規模というのは仙台とあまり変わりませんから、富山県というのは。もともと遼寧省と交流、特に大連と交流があったということで、大連にいる富山大の卒業生は大体組織化が終わっているんですよ。そうすると弁護士から医者まで全部いるんですよ、何でも。そうすると安心して、富山の企業が進出したときに、全部卒業生がサポートに入ってくれるし、あと、現地でいろいろな学術交流会以外にもビジネス交流会なんかだとみんな集まってくるんですよ。そういう体制がコンパクトなゆえにとれているんですよ。

だから、そもそもそういうことを考えていくと、中国というのは、今、非常に力をつけてきていますので、日本に投資する場合とか企業を進出させる場合にどこを選ぶかというとき、そういう人たちが活躍してくれる可能性が大分高くなってくるわけです。だからそんなことも少し議論しておいて、将来に立つ仙台の受皿づくりというのを考えていく必要があるんじゃないかと思います。

また、これはもう繰り返しになってしまうかもしれないんですが、東北大学も外国人宿舍の建てかえで例の片平の話があったり、あとウェスティンが来たり、あそこあたりは中華のお店とか中国人の方も多いということで、だんだんそういう目がもう、ちょっとその胎動みたいなを感じるようなところがあるんですよ。

一番心配なのは、その入り込めないエリアができてしまうことなんです、仙台市民が。

だから、今のうちからそういったことをやれといっても無理だと言われたらそれまでなんですけれども、ある程度予測はしておく必要はありますよね、どうなっているのかということは。そういう構えだけはちゃんと示しておく必要があるのかなという気がします。

あと、仙台市の国際交流関係のメーンの仕事というのは恐らく観光ですよ、基本的には。そうなっていますので、そこだけの仕事だけでいいのかという業務内容の見直しもここには入ってくるのかとちょっと私は思ったりします。すみません、私の認識不足だったら申しわけないんですが、そういうふうに思っています。

大滝精一委員長

論点２はたくさん、ものすごく多岐にわたっているのではなかなか。

はい、どうぞ。

江成敬次郎委員

別の問題で。

ちょっと私も今まであまり気にしていなかったんですが、この資料１のここの中に、「少子化社会における子供達が」という、子供という単語が出てきたので、これは委員長がやっぱり都市像の文書の中とか何かで子供ということを位置づけようという、そういうねらいなのかと感じたんですけど。それで、先ほど大村先生の話の中で子供の閉塞感という言葉があったのでちょっと私も気になったんですよ。

今まであまり私自身、子供のことは考えていなかったんですけれども、ある意味では高齢化社会の対極の問題ですよ。高齢化社会というお年寄りのことがかなり話題にはなるんですけども、その対極としての少なくなった子供たちの問題というのはあまり議論されることはないんですよ。ここでもあまりなかったと思うので、ちょっと私自身もあっと思ったんですけれども、これは自分自身の今の職業のかかわりもあるので、だんだん入学生がやっぱり大分頼りなくなってきたという、そういう状況があって、それはやっぱり子供の問題にかかわってきているんだろうというふうに感じたんですけれども。

何かやっぱり、この都市像の中の未来を築く学びの都という、そういう学都ということが出ているんですが、これはイメージとしてやっぱり東北大とか大学というイメージがものすごく強いわけですよ。だけどやっぱり子供たちを、次の世代の子供をきちんと教育するという、そこもやっぱり学都のひとつの柱として位置づけるということが非常に重要ではないかというのをちょっと感じたんです。

その辺は、この都市像の中に盛り込まれるかどうかということはわかりませんが、少なくともその文書の中にそういった視点を入れるということは重要ではないかとちょっと感じました。

大村虔一会長

大変ありがたいご指摘だと僕も思うんですよ。

子供が市民かどうかという話は、実はなかなか悩ましい。我々はどうも何かモラトリアムであるから、あまり直接、市民的には扱わないのが我々の多分風潮なんだけど、ヨーロ

ッパあたりは子供から意見を出させる、それからアメリカや何かでも田舎町が子供をそのまちに居させる努力として、小さい子供に地域社会への参加、あるいはその計画があるときに計画に対する子供の意見の聴取、そんなことをやっているんですよ。そういうことから比べると、我がほうは時々何とか議会なんていって、ちょっとそれらしい真似事はするけれど、あまり本質的に子供の声を聞いたりなんかしていることはない。

それをどうするか。ただ我々の文化の問題があって、なかなかそう言うとも又大村のやつは子供のことを言い出したみたいな話がよくあって、なかなか言いにくい部分があるんですが、本当はやっぱり小さいときからここに育って、しかもとてもいい教育を受けたと自ら思って、僕はそう思っているんですけど、ここで育ってそうだと思って、それである程度年をとってきて、仙台で何かお手伝いできるなラしようと思って、今、いるというような状況なので、そういう思いがつながるようにするといいなという気がするんですけども。

西大立目祥子委員

この絵の中に仙台に住まう誇りというのが大きく書いてあるんですけど、やっぱり地域に愛着というものがわからないと誇りというのは出てこないものだと思うし、恐らく小さなときの経験というものがかなり大きいのかなということを感じるんです。

それから、前にちょっと大村先生とご一緒した委員会で金沢に視察に行ったことがあって、金沢に行ったら金沢の市史をつくる、こども金沢市史というのをちゃんと用意していて、すべてのカリキュラムの中に金沢スタンダードというのをつくっていて、例えば前田藩のことを習う、江戸時代を習うのに前田藩から江戸時代のことを考えていくという時間をちゃんと確保しているんですよ。そういう意味では地域学習のようなことも大事なかなと思います。

あと、この2つ目の論点のところに、東北地方の状況で、人口がどんどん減って疲弊していくと書いてあるんですけども、私は、数は少ないですけども東北のまちとか村に出向くと、むしろ課題を先取りする形で住民の方たちが自らの力で自らのことは解決しようという動きがすごく活発ですよ。そういうことは仙台ももっと学んだほうがいいと思いますし、その子供を育てるフィールドは何もこのまちだけじゃなくて、東北の農山村の環境というものがひとつあると思うんです。農業というのが見直されていて、農業までいなくてもその農的空間というものが仙台の背後にこれだけ豊かにあることを考えると、やはり何かコーディネートする仕組みがそこでつくれば、仙台の子供たちをそういうところに送って、ある経験をさせたり、そういう相互の交流みたいなものを子供を通してということもできるのではないかなというのがあります。

大滝精一委員長

そういう視点はすごく大事だと思います。

それから、私の友人なんかも、最近小学校とか中学校で、NPOの人たちと組んで知学連携とかというような、狭い意味での職業教育とか起業家教育というよりも、やっぱり子供たちが自分の目標とか生きがいみたいなものを地域の人たちと一緒にあって見つけて

いくみたいな案はすごくいいんじゃないかと思っているんです。

それで、仙台はそういう意味で言うと、すごくそういう実験的な試みをいろいろな小中学校で始めようとしているし、学校の先生方なんかも最近そういうことに目覚めてきて、教育委員会でもかなり盛んにされていると思いますけど、そういうものは私は仙台の中でとてもいい事例じゃないかと思うんです。

そういう意味でも、子供を育てる新しいフィールドとか、地域全体を挙げてそういうところでやっていこうというか、そういう流れがかなりうまく定着し始めていると思うんです。だから、そういうことをもっと次の10年くらいで広げていくことができれば、それは大人だけではなくて子供にとってもすごく魅力的だし、そういう学校の試みに参加している人たちを見ていると、子供たちが活性化しているだけでなく、教えに来ている会社の人たちがすごく喜々としてやっているんです。そういう流れがすごくいいんじゃないかな、そういう子供の教育にフォーカスを当てて、従来いわゆる教育という世界に入ってきた人がいっぱい来て変えていくみたいなことがあって、それがまた子供の目にもすごく新鮮に映って、新しい方向を見つけていくことができるようになってくるという、そういう方向は仙台で持っている非常に大事な土壌じゃないかなと思っているんですけど。

小野田泰明委員

僕は金沢教育を徹底されたので、何か前田藩のどうのこうのというのは懐かしく思い出しましたが、それがいいのかどうかはよくわかりませんが、仙台でも一生懸命やっていると思いますけれども、うちの子供の教育を見ていると。

僕、長野で小学校をつくったり、千葉で小学校をつくったりして向こうの先生と話をすると、やっぱり仙台の社会教育は結構ちゃんとやっているような気がしますけど。社会関係の地域に出てやるようなものというのは割と仙台はちゃんとしているなと思いますけど、一方で仙台の先生の話の聞くと、セキュリティの問題が、地域に出すときにセキュリティが担保されないからやりたくてもやれない、やれる学区というのは結構限られているんですよ。コミュニティがしっかりしているところは出せるけどそうじゃないところはとても怖くて出せないというふうに制度がなってきて、この地域教育の問題というのは、コミュニティとの連携が非常に必要で、そういう意味では仙台市の教育委員会はちゃんとしていると思うけれども、やっぱり他部局との連携ということからするともうちょっと先進性を生かすことをやったほうがいいかなと。

なかなかコミュニティと教育というのは、がんばってやっているところはやっていますけれども、それはボランティアに地域の人のがんばってやっているだけで、上からサポートを支援してやれているわけじゃないから、そういうのをもうちょっとちゃんと枠組みで支援してくれるとおもしろくというか、もうちょっと一般化するんじゃないかなと思います。

大滝精一委員長

ありがとうございました。

ちょうど時間になったんですけれども、今日は随分私とか、大村会長からもいろいろな論点を出していただいて、問題を投げかけたということもあると思いますけど、かなりある方向での意見の集約ということはできてきているんじゃないかと思います。

ただ、このままでちょっと審議会に持っていくというのは難しいと思うので、大変申しわけないですけれども、もう一回、3月の半ばかちょっと前くらいのところで、今日のいただいた意見を集約する、それから、これは懸案で解決していないんですけれども、小野田先生から先ほどいただいた手書きメモをどうやって見ていったらいいかということについても、もう少し意見をいただいて、それで次の審議会に報告をするというふうにしたほうがいいのかと思うんです。かなり煮詰まってはきていると思いますけれども、もうちょっと、もうひとがんばりするということで、大変、3月の年度末のものすごい忙しいときに恐縮なんですけれども、あと一回だけ開かせていただきたいと思いますけれども、いかがですか。

もちろん日程の調整をしなくちゃいけないので大変そこは恐縮なんですけれども、できるだけ多くの皆さんに集まってもらえそうな日時を選んで、もう一度だけ、最終的にこんな形でという提案の中身を固めていきたいと思いますけれども、よろしいですか。

それではすみません、お願いします。

一応、今日の議論はここまでということで、もう一度、後で事務局と私を中心として、今日の意見をどんな形に集約するか話をして、少しまとめてみたいと思っています。それでもう一回皆さんからご意見をいただくということにしていきたいと思っていますけれども、そちらの集約の仕方ということについては、こちらで少し作業をやりたいと思います。よろしくお願いいたします。

3 閉会

大滝精一委員長

それでは、一応今日はここまでということで。

折田総合計画課長

事務局から今後のスケジュールについてご連絡を申し上げますけれども、今、委員長が、内々に皆様には日程の調整を事前にさせていただいておりましたけれども、次回は3月10日の18時30分、午後6時半から開催をしたいと思います。また正式にはいつものとおりご連絡を申し上げます。その際に場所も含めてご連絡をさせていただきます。

それからその後でございますが、3月25日に審議会を予定しておりますので、それに向けて議論を集約していくということでよろしくお願いいたします。

事務局からは以上でございます。

大滝精一委員長

よろしいでしょうか、今、事務局がお話ししましたように、起草委員会は10日の6時半からですか。それから、その後の審議会については25日の午前10時からということでご予定してください。

委員の皆さんのほうから何かありますでしょうか。よろしいですか。

何か委員長の不手際で、なかなか最終的にこれだという提案が出なくて大変申しわけない、恐縮なんですけれども、難しい課題なのでそのところは是非お酌みいただいてということで、大変年度末のお忙しいところ何度も何度も足を運んでいただいて恐縮ですけど、よろしくお願いいたします。

それでは、今日はこれで終了します。ありがとうございました。